

『配給物絵日記』

〔凡例〕

- 一、日付・天気・品名・金額・説明の順に記した。
- 二、物品ごとにまとめて記した。
- 三、略字は正字に替え、旧字はそのままとした。
- 四、すべて縦書きに統一した。
- 五、改行は「」で表した。
- 六、( )内は編者の注記を記した。
- 七、読み取れない箇所は□で記した。
- 八、「」は朱線等の範囲を示した。

翻刻・

昭和館学芸部 渡邊一弘・財満幸恵

◆ 133

◆ 135  
 九月号配給「絵日記續き」  
 九月十七日、むしあつし。「時々雨あり。」  
 きやべつ、「六錢也」  
 十七日晚、「  
 牛肉 三十目 六十錢」

◆ 134

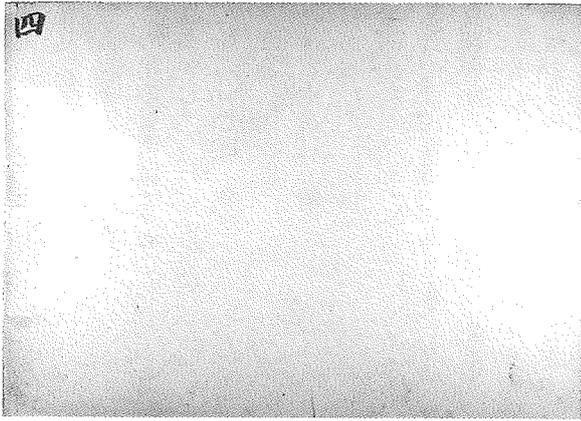
◆ 136  
 九月十七日 夜、台風気味の「風強く吹く晩也」  
 梨 二個 百目、「三十三錢也」  
 果物は病人「ばかりかと思つ」たらめづらしく「配給がある。」  
 十七日 晩「  
 半ペン」二ツ「一ツ」十七錢「つ、二ツ」三十四錢「  
 つみ入れ」のような「もの」少々價は佳い」  
 九月十九日晴「  
 豆腐 二丁 二十錢也」  
 おから 十二錢」  
 ◆ 137  
 九月十九日 快晴「十二時半頃〔朱線〕警戒警報有」サイレン鳴る」但シ〔朱線〕三時には解除サル」。夜分は管制訓練あり。」  
 キヤベツ 九錢也。」  
 九月二十日 晴「  
 海苔佃煮 五十錢也。」  
 九月二十一日 晴、「  
 うどん粉」〔朱線〕「一円五十六錢也、」  
 二人分、「遠山様扱」  
 九月二十一日 晴「  
 きやべつ 八錢」

◆ 138

九月二十一日 夜、「  
 コブの佃煮」三十三錢也」  
 九月二十二日 夕「晴」  
 かれい 二尾 三十錢也」  
 九月二十三日 曇  
 大根と葉 五錢也」  
 めづらしく「大根半本」

◆ 139

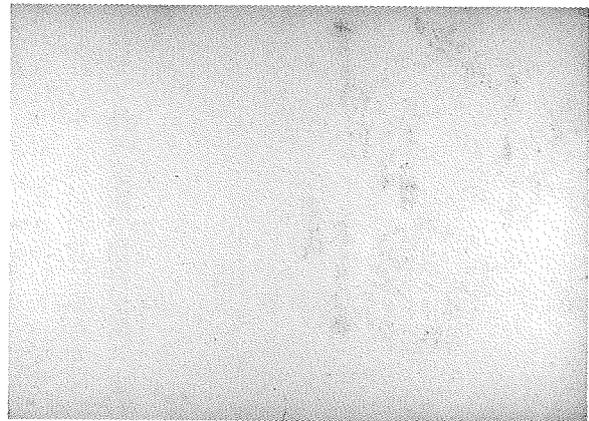
九月二十五日 曇り」  
 ギガイモ 二ツ「四錢也。」  
 九月二十五日 夜」  
 栗 十七個「拾二錢也」  
 九月二十六日 曇雨。」  
 ホツケ 拾四錢也」  
 この頃配給が良い「魚の配達して下さる。」シツポ「オマケ」  
 九月二十七日「晴」  
 昆布「二十四錢、」



◆133



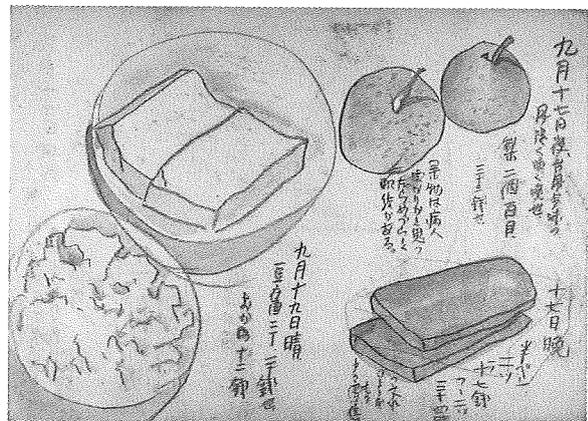
◆135



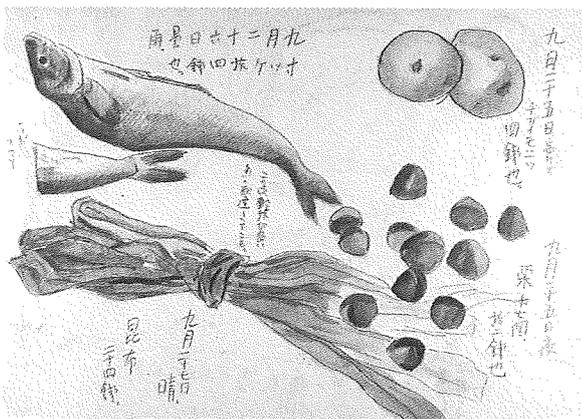
◆134



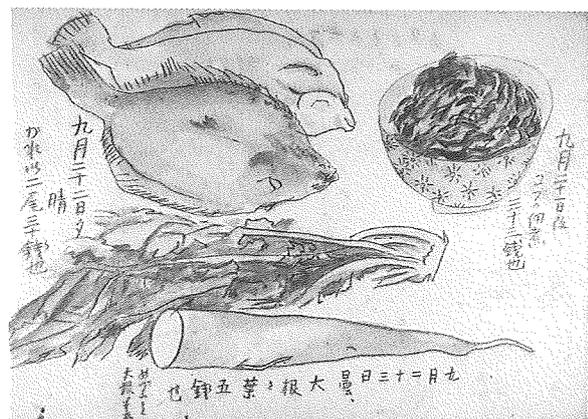
◆137



◆136



◆139



◆138

◆140

九月二十七日「晴、」豆腐 一丁。「拾銭也。」

この頃の豆腐は「きぬこしで美しいうまいし」今日は一丁だけ。」

九月二十七日 夕

かほ茶 四銭也」

九月二十八日 晴

おから 十三銭也」

早朝豆腐配給有」十銭

朝食の汁になる。」ありがたし。」

豆腐のからは昔は、安かったものですが、「この国では、おからの方が良いようになって」ゑます。」

二十八日 夕

パン粉」二十目 六銭」

◆141

九月二十九日 晴

久し振りの胡瓜半分」九銭とはいいいなり。」

二十九日 夜

栗 十二、拾銭」

九月三十日「晴後小雨、」貝類 百目」二十四銭也」

はまぐり、あさり、バカ等」等小貝

五十七個あり。」

九月中の配給は相当毎日よく頂けました。有難い心配して」頂いてゐます。政府では、魚野菜と骨を折って下さる新聞誌上の様子」ですが実際は中思ふ様にならないもの、闇闇と某方へ流れてゐるもの」らしい、

それだけヨ計心配が多いわけです。」

三十日ハサイパンの次にまた大宮島

テニヤン島の全滅の発表がありました。」

テニヤン島の全滅の発表がありました。」

◆142

十月配給」繪日記續」

十月一日 雨

戦時補給罐詰 六個」三円六拾銭也。」

非常用につき、たべてはいけな

由。」食へない罐詰なんか無駄な金である。」

◆144

十月四日 雨、」

かつを切身」二十八銭也。」

十月五日 雨

かふだか大根か」合のこ」化もの。野菜」九銭也。」

◆143

九月三日 夜、特配」

九個」拾三銭」

拾月老日 雨曇」

甘藷 五銭」

十月三日 晴」

今日もまたおいも」三個 七銭也。」

◆145

十月七日 雨

大根 六銭也」

十月八日 晴」久し久の晴れてよき日」

かれいが大漁 十尾」二十八銭也」



## ◆146

十月九日 晴  
 おいも 三ツ 六銭  
 十月十日 晴  
 小ローソク 二本 三銭  
 非常用にと、「可愛いローソク」  
 十月十一日、曇。  
 大豆 二升「一円二十銭」  
 大変良い豆です。「ありがたい配給で」ある。  
 この大豆、見かけ柄は、「素人目に良い豆と思ひましたら、」虫付きですでに、虫が出た跡でした。」

## ◆148

十月十四日 晴風有  
 豆腐「二丁」二十銭  
 絹こし「美しい豆腐」  
 うの花 十三銭  
 おからと「申して高價です」からバカになり「ません」昔なら「二位」なものが。  
 十月十四日、風強し。  
 塩マス 二切「十二銭」  
 十月十五日 薄日利。  
 めづらしい「煮干」二十四銭。」

## ◆150

十月十八日 曇、「夜」  
 半ペン「四十六銭也」  
 はんぺんとは白いものかと思ひました「が戦時色で目方で配給で二つ切お」まけがあります。随分インチキな、「ものを作り配給したものです」  
 十月十九日 曇。  
 牛肉「六十銭也」  
 十月十九日 曇り。  
 おいも 四個、拾銭也。  
 十月二十二日 薄日  
 鮫 二切「七十七銭」

## ◆152

十月二十六日 晴  
 ソース 一合「十四銭也」  
 十月二十六日 晴  
 鱈 一尾「十七銭也」  
 十月二十七日 雨、  
 おいも 五個 三十二銭  
 大きいおいも「  
 二十七日夜」  
 自由配給の「いも」二十銭  
 くづ「落ち」と  
 くづ落「大きい」十コ」

## ◆147

十月「十一日 曇」  
 大根 一本「十二銭」  
 シツポカ切つ「てあるのは「目方の都合か。」  
 十月十一日 夜  
 澤庵 二十目、「六銭也」  
 十月十二日「曇」  
 焼海苔「七十銭」  
 十月十三日 晴  
 大根めづらしく全身の大根「十四銭也。」  
 葉も全部付いて「ゐます。」

## ◆149

十月十五日「薄日利」  
 大根の大物「十八銭也」  
 十月十七日、祭日「午后 雨」  
 十二銭也」  
 蚊取線香、一ツ、十銭  
 蚊がいなくなつ「てから一ツ」配給。  
 十月十七日  
 障子紙 二枚 六銭  
 障子紙は「切張り用の」ため正月には「少し風がはいらぬ」障子にさせたいためと。」

## ◆151

十月二十一日「雨晴」  
 大根 八銭  
 十月二十三日 曇 寒くなり。  
 おいも 八銭也  
 十月「二十五日」曇  
 おいも 五ツ「十八銭」  
 大きい。」

## ◆153

十月二十九日 曇  
 おいもの大漁 二十銭也  
 大小合せて大七個あり「大安賣り」  
 十月三十日 雨  
 鯨 一尾「十一銭也」  
 十月三十一日「晴」  
 大おいも十個  
 大根 二個「五十銭」  
 寿大根らしい「ありかた」  
 あまりきた「ないので」洗いました  
 たくさん配給です」



◆154

十一月号「絵日記つゞき」  
十一月一日 晴  
柿 三個 二十二銭

◆156

十一月三日 雨「切角の明治節」も  
朝来雨  
めづらしい「鯛 四尾」二十銭也  
十一月四日 晴  
下駄配給有「九十銭」  
杉の白木下駄  
十一月五日、曇、晴たり、「〔空襲〕  
警報あり」  
おいもの最後配給の由「一貫目 五  
十四銭也」  
諸は「てっかいのと」小さいのと  
十五個位「あります。」

◆158

十一月十日 晴  
白菜 四半「八銭也。」  
十一月十一日「曇。」  
大「イカ」二十四銭也

◆160

十一月十五日「晴  
半ペン」三十七銭也  
十一月十六日 雨  
こかぶ 大小七「拾銭也」  
十一月十七日 晴  
久し振りにそば 四ツ 六十四銭  
也」  
十一月十七日  
甘藷 五百目「四十三銭也」

◆155

十一月一日 晴  
高野豆腐「六個配給」十銭也  
敵機来襲〔未録〕の「〔サイレン有〕」大  
さわき「あり」  
あわてみつとも「ない午后なり。」  
四時半頃「〔解除される〕」  
十一月一日 晴  
米と差引のおいも「雄大なるもの」  
と九個。「四十四銭」  
十一月二日「曇」  
こかぶ 五ツ「四銭也」

◆157

十一月六日 晴「風強し 警報サイ  
レン」鳴れども間もなく解除「され  
る。」  
牛肉「六十銭也」  
十一月六日 夕  
大根「七銭也」  
十一月七日 晴「警報午后なり」敵  
機二ツ来た由  
シヂミ 十二銭也  
十一月八日 雨  
フキツクダニ「四十二銭也」  
十一月八日「夜雨」  
かぶ 四ツ「九銭」

◆159

十一月十二日「曇」  
土付お葉「六銭也」  
十一月十四日「晴」  
小かぶ「三個 七銭也」  
十四日晚に十二日のお葉物と「同じ  
物が〔特配を〕得ましたが、繪は  
略することにしました」描き映へも  
しません故「代價は二十銭也。」

◆161

十一月十八日 雨  
蕪 五株「と小」十五銭也。  
また蕪かと「思ふが」ありがたし。  
十一月十九日「晴」  
塩マス「二切」  
十一月廿日「曇。」  
めづらしいねぎ「十四銭」



◆162

十一月二十二日「晴  
 そば 二ツ」三十二銭」  
 十一月二十二日「晴  
 ちり紙」二張」二十銭」  
 十一月二十二日「晴」  
 おいも 六ツ」二十八銭也」  
 十一月二十三日「晴  
 にしん。」二十四銭」  
 十一月二十四日」  
 さつまいも 十五銭」  
 かふの葉」  
 十一月二十五日」  
 さつまいも 八百匁」四拾参銭」  
 お米の通ひにつけた。」  
 二十四日空シユーも二十五日警」カ  
 イ」ケイ」ホー」  
 二十五日」  
 ねぎ 拾五銭 三本」  
 二十六日」  
 さめ二切れ、 八拾銭」  
 午後八時警報、」

◆163

〔十一月二十九日、二人分、〕晴  
 静カナリ。  
 〔牛肉 金六拾銭。〕  
 〔一寸五分位の長〕サの五分位の中  
 の肉、八切れ」と、アブラ、四切れ」  
 十一月三十日」  
 ハクサイ 十五銭」  
 十二月一日」  
 サツマイモ 四十二銭」  
 十二月一日  
 イカ 五十八銭」  
 三十銭分ハ特配」  
 シシトウ 八銭」  
 十二月 サツマイモ 拾五銭 晴  
 静カナリ」  
 十二月二日  
 お米 二十キロ 七円九銭」  
 十二月二十九日 晴」  
 お餅、」正月用もち」一キロ」一円  
 二十銭」  
 数の子」十六銭」  
 焼海苔」五十五銭」  
 黒豆」十一銭」  
 だいだい」七個」  
 大根シメ 一円二十銭」

◆164

昭和二十年二月」  
 大東亜戦争も四年目」及び愈々苛烈  
 なるB29の」来襲はげしくなり國民  
 の」生活必需品の配給制度」が増々  
 窮屈になり、公正なる」配給生活者  
 に聞かない」實際生活を與へられる  
 か」を想ひ記録図絵を再度」画す」  
 耐乏生活資料に」

◆165

二月一日」曇り」  
 牡蠣」四十三銭也」  
 白隠之豆」十一銭也」  
 二月二日 雪」  
 このソース一本を二軒で分て配給  
 二十四銭也」  
 酢 一合 十銭也」  
 二月三日 晴 毎日風あり。」  
 馬作蒔」 八銭」  
 小サイもの十五個」あり」

◆166

二月四日 晴」  
 数の子 十四銭也」  
 二月五日 晴」  
 福神積 十四銭」  
 二月七日 曇」  
 豆腐」二丁」二十銭也」  
 二月九日 晴」警報有来襲」なし」  
 才大根 十二銭」  
 二月十日 晴」警報あり」一キ来」  
 しかすぐ」解除あり」 おから 十  
 銭」

◆167

二月 十一日 晴」  
 鮫、三切」一人二十四銭也」二人四  
 十八銭」  
 二月十五日 晴」  
 大根 二十銭也」  
 二月十五日 晴」  
 みかん 七個有」二十四銭也」  
 十五日より十六日十七日と」敵鬼来  
 襲有。」ことに十六日早朝より近海  
 に」空母により艦載機は十七日に」  
 及び警報は解けづ。」  
 二月十八日」晴」戦果米鬼」三百以  
 上あり」警報もなく」静也、」  
 佃煮 十五銭」  
 ありがたし」



◆168

二月二十一日「曇」〔硫黄島に〕敵上陸した」と

〔ねぎ 四本〕「大ねぎであり」大十八銭

二月「二十五日」大雪、

鮫「二切」三十四銭

二十五日は二回目の大雪が降り」最中にB29百三十鬼と艦載鬼が」来襲あり、各所に盲爆して廣小路」あたり火災をたくさん起して居る相である。」宮内省主馬寮にも、又大宮御所にも」落して行ったと新聞にあり。

七軒町にモ一ツあり」配給は、野菜が一週間目、魚介は」十日目に配給になってゐる由、」決戦下少しでも配給があることはありがたい」こと

三月

◆169

三月配給記」

三月一日「薄日寒シ」

白菜」十二銭也」

三月二日雨」

おから」四十五銭也」

豆腐」一丁」拾銭」

◆170

三月三日「晴」

昆布佃煮」十二銭

三月六日「曇、」

馬令煮 七個」十二銭

三月九日「晴」

焼チクワ」三分二。」二十銭

冷凍」

三月十二日「晴」

大根」三銭

三月十五日「晴」

みかん 二個」

三月「十三日 曇、」

大ねぎ」二本」六十目」

三月十七日「晴寒風」つよし、」

大ねぎと」京な少々」

三月十九日「晴」

たくわん」

三月十九日「晴よき天きなり」風もなく」

みかん 四個」

三月十五日より」今日のみかんまで」七十四銭也」

◆172

三月十九日「晴」

おいも 二切」十五銭也」

慰問品として」フカシてあり、」古いから凍つ」てゐる由」

三月十九日「晴」

切ほし大根」

三月廿日、晴」

鱈、三切十八」五十四銭」

三月廿日「晴」

生ブト酒 二円四十銭」

三月廿一日「晴、」B29」二回」来襲有」

みかん 四個」

同日

かつぶし」一円七十三銭」

三月二十二日「曇り風有」

ねぎごぼう」大根」九銭也」

三月二十三日「晴、暖くなる。」

ゴボウ 五本」大小」

みかんとゴボウ」四十五銭」

◆174

三月二十四日「晴少々寒い」

イカ 半分」二十四銭」

昨日」〔大戦果發表有〕」新聞による。」

〔五空母、戦艦二巡三〕」等」〔十一艦撃沈〕」めでたし。」

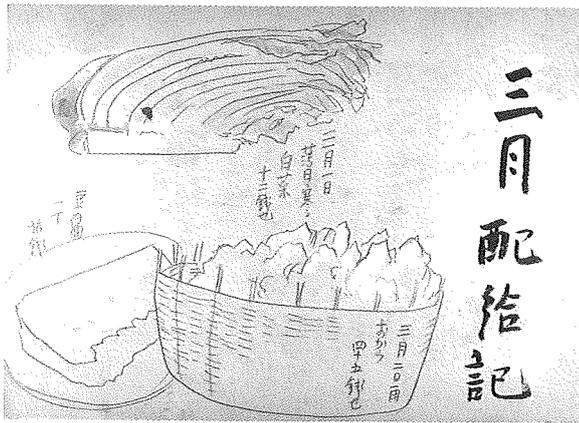
◆175

三月十日の大爆撃にあわや」焼滅の運命かと思つたが幸ひ」神助を得たか」一歩手前でしたか」る種々都合で埼玉縣へ疎開す」ることになり、八月十四日の降伏も田舎」で受けることになり七軒町にゐて敗戦」後の配給記録を描いたら」一層意」議が有つたらうと思ふが遺憾の至」りである。」

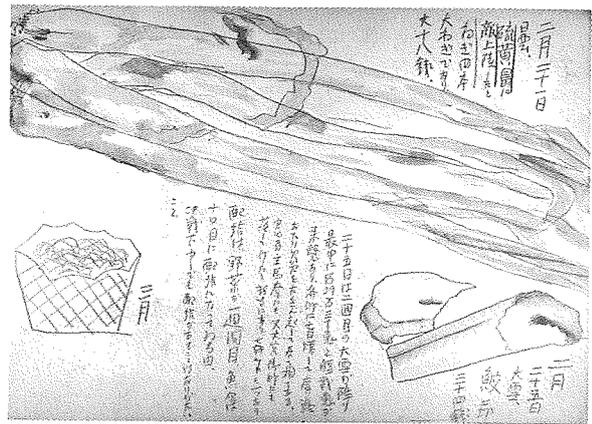
昭和廿年十月日」

於埼玉比企郡南吉見村」

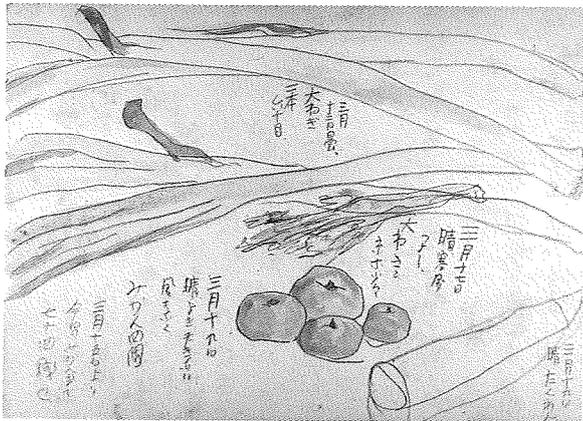
小泉癸巳男」



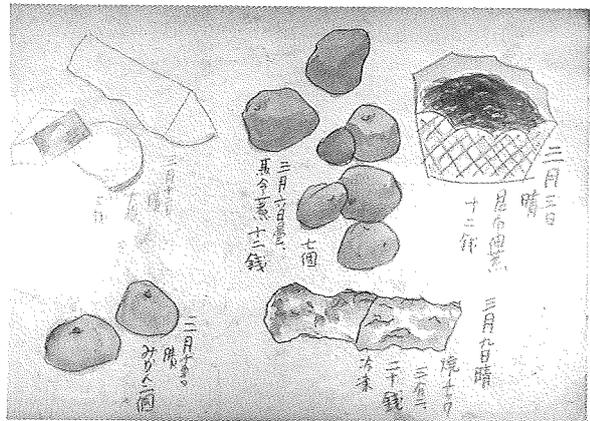
◆169



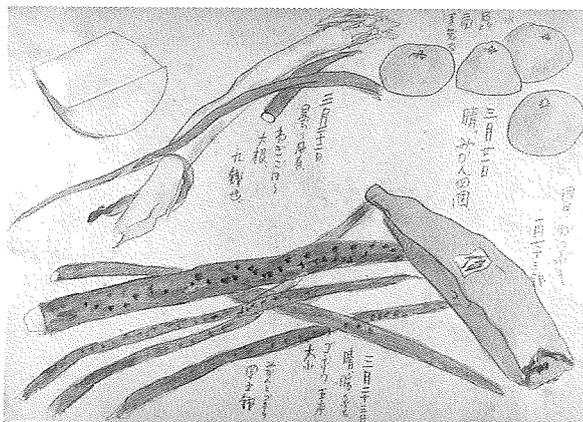
◆168



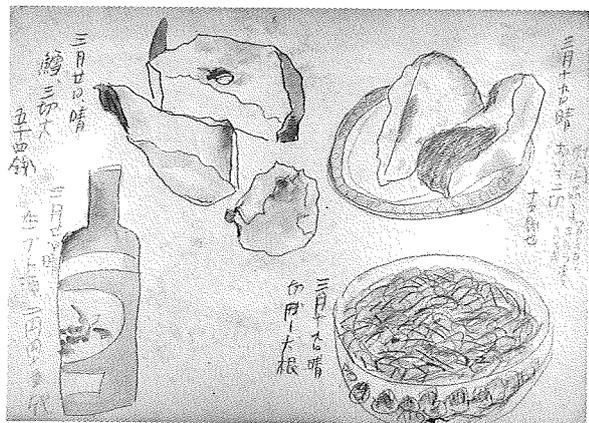
◆171



◆170



◆173

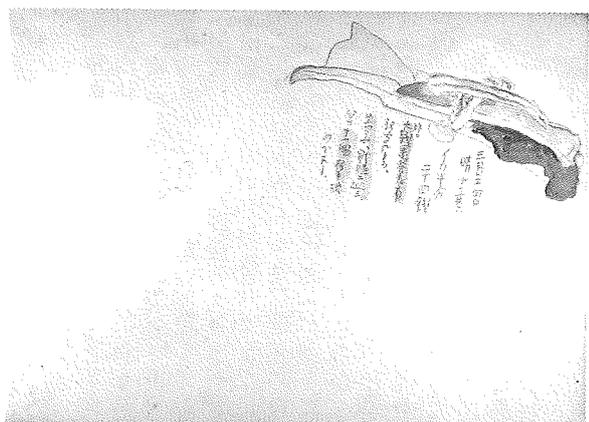


◆172

三月十日の大爆撃にあらや  
焼滅の運命かと思つたが幸ひ  
神助を得下か一歩手前ではあ  
る種々都合で埼玉縣へ疎開す  
るに及り八月十四日の降伏も田舎  
で受けることになり七軒にわたる敗戦  
後の配給記録を描きたら一層意  
識が有らうと思ふが遺憾を呈  
してある。

昭和廿年十月日  
埼玉北佐郡南高見村  
小泉癸巳男

◆175



◆174

謹啓、愈々秋冷を感じます氣候」に成りました。今年は暑氣甚しくたまらぬと云ふ様な日はなく涼しい夏でした。」尤も自分の肉体がいつも健全でないた」めだったかもしれない。常にさむけを感じ」てゐたのでこの夏は涼しいと思つて□□□□も」しれません。版が一匁あるので摺つて見う」と思つて、やつて、途中事たりして、しまつたが」カビがはえて、もつたない紙を無駄にして叱」かられる。どうも工合が悪悪い面白く無い日」を送つてしまひました。」配給日記は皆様から好評を得て」ゐます。複製を作れば良いと申され」ますが、そんなことをするより全部お」渡し申して、必要な労は拝借するよ」うにした方が良いと思ひます。代價」などもおませ申して御自由に願ひます。」実はこの肉体が今年五十三年の生涯」たつたら世話はないのですか不」二版を完制して」また役に立たせたいならどこか温泉へ」

療養に行きたいとも思ひます。疎開以来」収入はなしチエ子様の御機嫌も悪るいし」この頃すっかり冷氣でゼンソク気分にも」苦しめられてせきで夜中も苦しめられて」いくぢなしになつてしまいました。」旅行も食糧持参では全ク困りますことに」非力になつた肉体は困りますチエ子様同列を」願ひにもこれから農家は多忙になるので」一緒」に出てもらはずどうなるものか考へてしまひます。」七軒町の家は小屋等が長く住んでよかつたと」思ひます。金か出来たら買つて総二階にでも」したら皆様の休息所にお泊りも出来るように」したいと希望してゐましたが、頒布會の會費」位では生活ひにも足らず家を建てる」□□□□も」飛だこどだと思へました。」金を借りる時あなたには後援者も無い」のですかと云われたことがあります。たいいて絵」かきさんなんて、後援者か一人二人あつて、金の」不自由はない筈だと思へたのでせう。」

不二版ものこり少なくなりまして。元氣が」出たら完制してしまひと思ひますそれに」ついて會費か安すぎるからね上げしたい」と希望してゐます。チエ子様の要求です。」材料もなし不自由の内に仕上げてゆくだか」ら少し後援者の御迷惑をかまんとして頂いて」八田位にしたいと申してゐます。何分よろしく」お願ひ申上ます。」近く荷の發送も出来る相ですから」荷造して配給日誌は送り申上ます。」肉体の弱氣の奴はとかくぐちになりた」かります誠に申わけありません。」では降伏調印でまた命長らへました。」皆様御大事に祈り奉ります。」

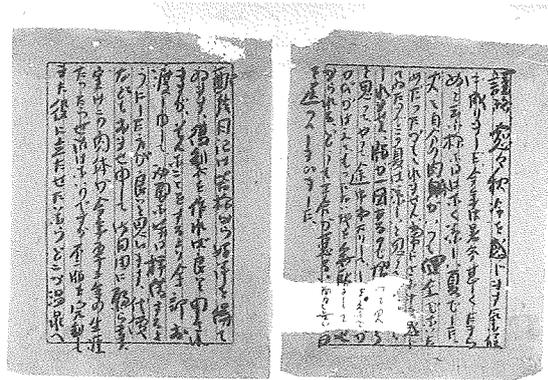
敬白合掌」  
九月二十八日夕 小泉癸巳男拜」  
鹿熊幸吉様」

昭和二十年七月」

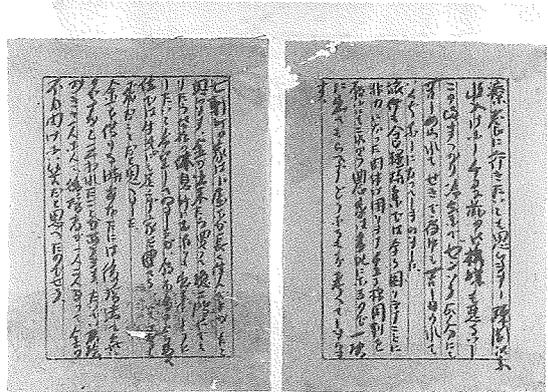
大變御無沙汰してゐます。皆様御變りないことを祈つて」居りますか日ごと夜毎のB29の来襲で落着いた氣持」を得られなくなつた昨今、お互あすの運命もわからぬ戦」時、私春以来健康が狂ひを生じたのか、非力になり重」いものを持つことが出来なくなり、凡やりした日を送る日にな」りました。チエ子様引づられるように、上記の處へ急に、」疎開して参りました。十日余日になります故、元氣も付いて」くれれると思つて努力して養生してゐます。不」二版も出来」ずお送りすることも出来ませんので困ります。」先は轉居御通知ながら皆様御大事に。敬具」

昭和二十年十二月二十日」

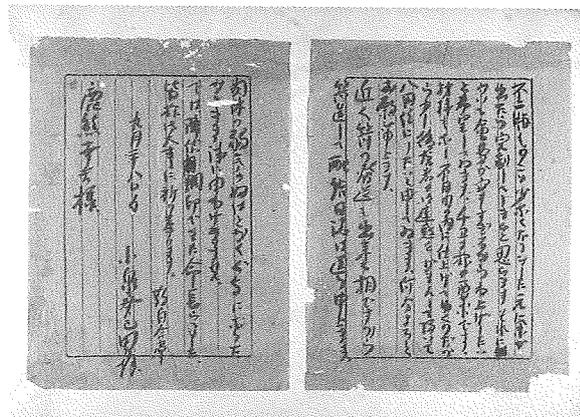
起居舉動に胸苦しいせきたんと不自由な肉体」になつて十一月一日から床に寝込んでしまひました。」五十三年の生涯とありがたいと思つてあてもまだ早いと」周邊の人々さわぎで棺槨から引づり出されてまだ日夜」せいせいいたんせきに苦しめられてゐます。」配給日記も、別々にするより一所に置いて下さる方が」何か拝借する場合も都合が良いと思ひ函帳、御送付申」上しました。代金はみでのちの御都合。御不用だつたら」御返送下さらばよろしく。チエ子様の御意に叶ふ様に」願つたらありがたい極みと存じます。くるしいから失礼」



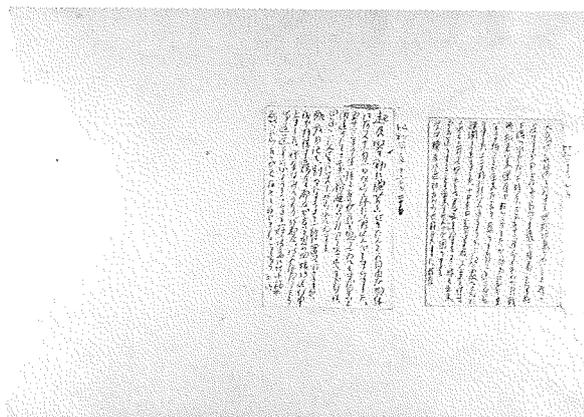
◆176



◆177



◆178



◆179

◆  
181

◆  
180

◆  
183

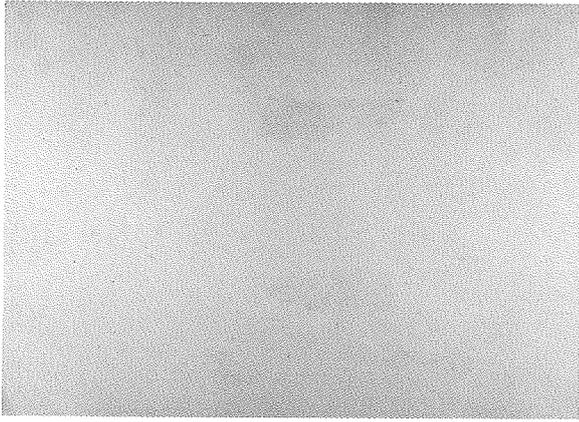
◆  
182

◆  
185

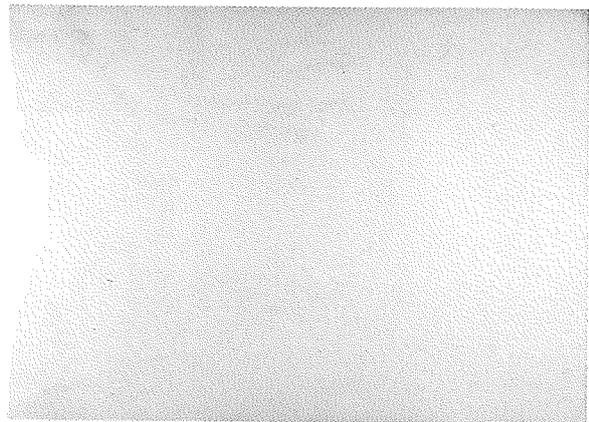
◆  
184

◆  
187

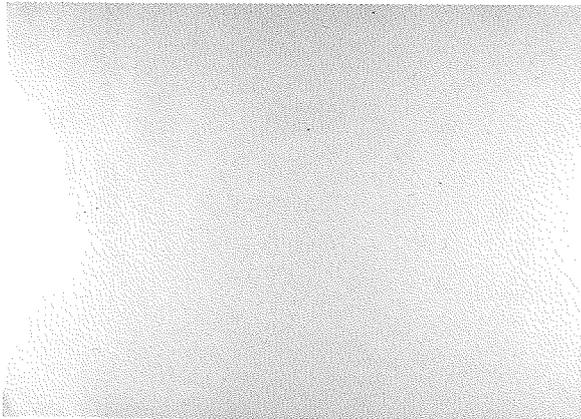
◆  
186



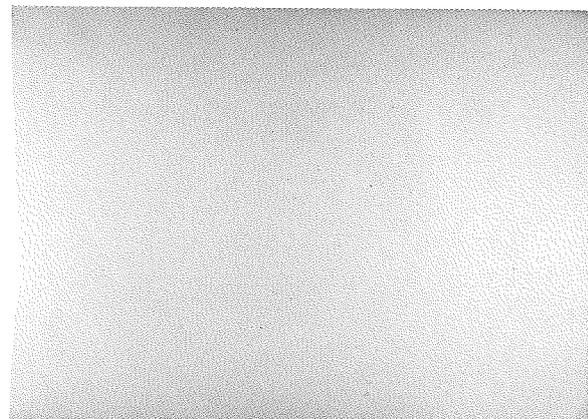
◆181



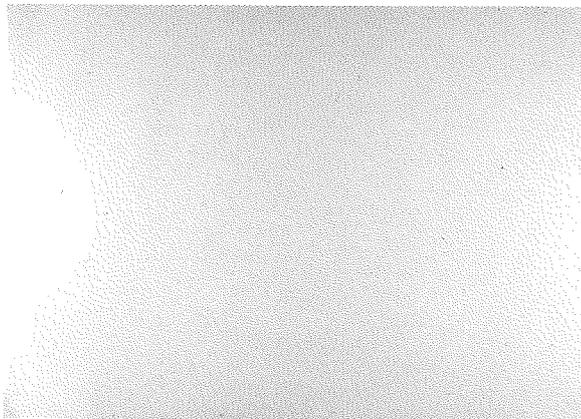
◆180



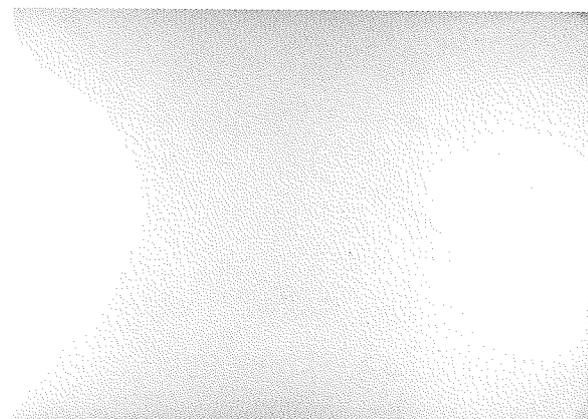
◆183



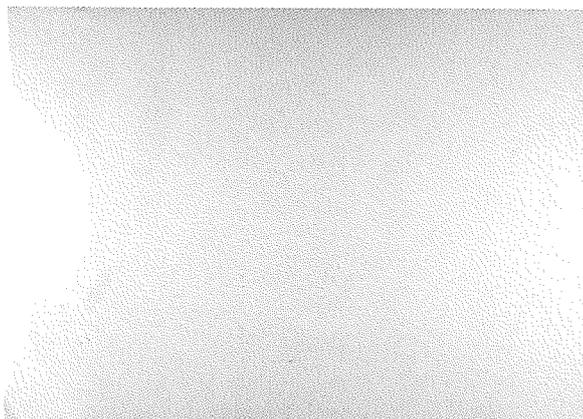
◆182



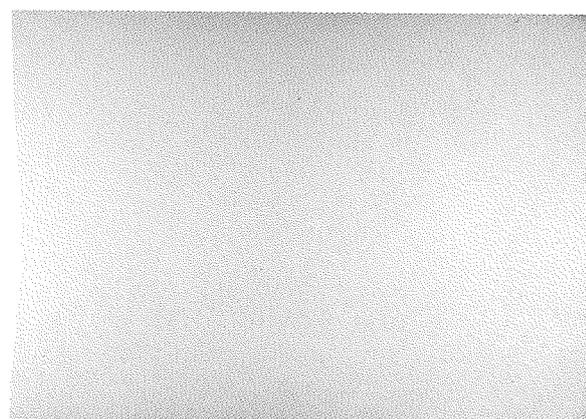
◆185



◆184



◆187



◆186

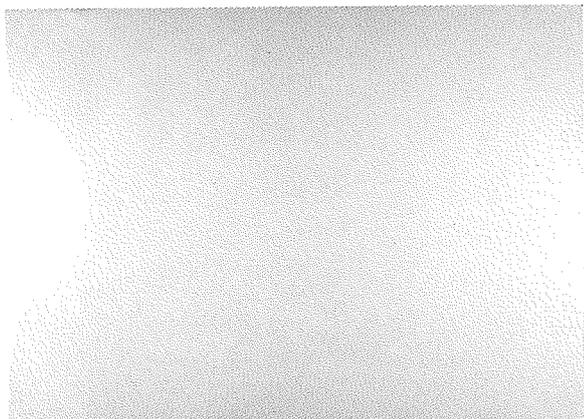
◆  
189

◆  
188

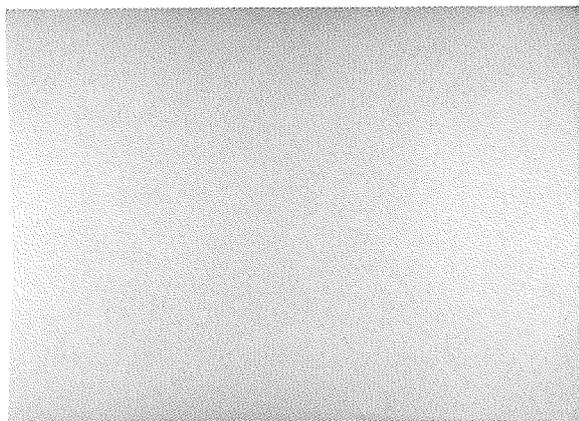
◆  
191

◆ 190  
二十年一月十五日  
「木内様より」頂戴せる

◆  
192



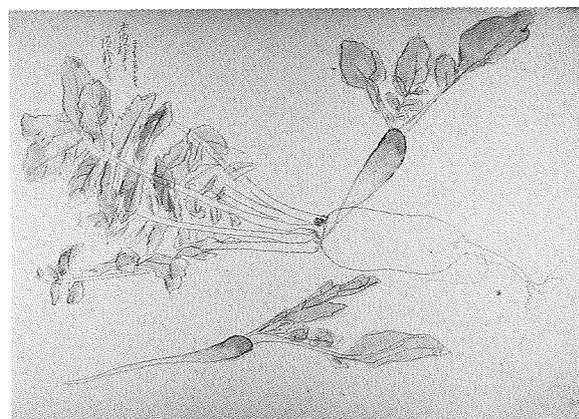
◆189



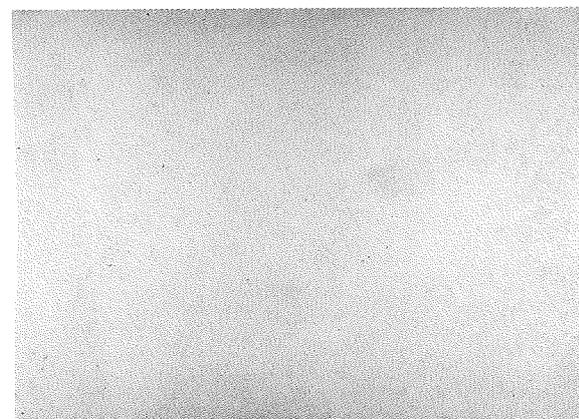
◆188



◆191



◆190



◆192